

丹羽文雄 新人生論

丹羽文雄
新人生論

中村八朗編

秋元書房

新人生論

定価 550 円

昭和 46 年 6 月 10 日 印刷
昭和 46 年 6 月 15 日 発行

著 者	丹 羽 文 雄
編 者	中 村 八 朗
発 行 者	秋 元 英 子
発 行 所	株式 会社 秋元書房

東京都新宿区赤城下町42番地

郵便番号 162

電話・東京(268)0758代表

振替東京27047

乱丁・落丁のものは、本社またはお買いもとの書店にてお取りかえします

組版・西田整版 印刷・皆川印刷 製本・徳住製本

© 1971 Printed in Japan

0093-3218-0029

目 次

愛について

愛と性

愛の弱点

若い愛

現実的な愛

愛の美学

愛の荷物

浮気心

人間について

文学と人間

経験とは

生き方

生命力

7

25

31

36

53

71

81

85

87

94

100

115

肉 身

理性と感情

家庭の絆

宗教について

根源的な力

他力と自力

人間性の底からの声

宗教と社会性

悪人の思想

自己放棄の彼方

親鸞抄―その教えの本質について―

文学について

小説というもの

124

128

134

137

139

147

158

162

164

168

175

219

221

非情の精神

小説と思想

デフォルメと散文

先生の人と作品―師弟問答―

中村八朗

あとがき

235

237

242

249

265

愛について

愛と性

夫婦愛とはもちろん、性愛によって裏付けられたものではあるが、夫婦が朝から晩まで性のことを考えているわけではない。結婚して何年も経てば、しぜんに夫婦の間では性生活から遠ざかって、そのこと自体に興味がなくなったような時期もある。しかし、それは、片一方が病氣かなんかで、絶対に、性生活ができないという場合ではないかぎり、いずれは性慾なり、性愛なりの可能性があるから、夫婦の愛情も支えられてゆく。これが、まったく性生活ができないという状態になったとしたら、それから生じる精神的苦悩が、いろいろな方向に影響してきて、とうてい安定した精神は保てないだろう。夫婦の間で、肉体的な関係を結びうる可能性が残っている限り、夫婦の愛情は安定した形で続いてゆくことができるのだ。

(性慾・性愛・夫婦愛)

性愛の満足だけというものは、必ず限度がある。決して長続きするものではない。

男というものは、妻以外の女を持つとそのよろこびに夢中になる。そしてその喜びが大きければ大きいほど、そのことの束縛もまた大きく、反動的に冷却する度合も激しいものなのだ。

(性慾・性愛・夫婦愛)

*

結婚四カ月目に夫婦仲があやしくなった例が、私の身辺におこった。私の妻ははじめから、その結婚には反対であったが、強いて反対することもないので、傍觀者の立場をとっていた。案の定というのが、妻の氣持らしい。結婚するまでは、当事者及び周囲は、みな希望的觀測のもとに、この結婚がうまくいくだろうと思っていた。たれにしても、そう思うだろう。が、四カ月が経つと、夫婦が別居することになった。すべてが絶望的觀測のもとに、妥協の余地をのこさなくなつた。たがいの申分には、もっともなところがあり、一度ひびのはいったものは、決してもとどおりにはならないという解釈のもとに、別れることにきまつた。しかも嫌っているようすもないので、若い二人はふり出しに戻ることにまつた。

しかし、本当の理由がだんだんと判つてきたところによると、私にはすこし意外だった。夫婦の性生活の破綻であつた。男は頭のよい、将来性のある人間であり、私たちもよくその人となり

を知っていたのだが、その人物の性質をくわしく知っていたというのではなかった。おそらくその問題は、彼の両親にしても、兄弟にしても、不明であつたろう。彼は二十八になるまで、恋愛をしたこともなかった。会社につとめるようになってから、商売女とあそんだことはあつたらしい。そのことが、結婚破綻の大きな理由になった。もちろん、女の方も恋愛の経験はなかったらしい。彼女は二つ三つ年上の、夫婦生活の経験者にいろいろと知識を与えられ、またそのひとに何もかも報告していたようである。

「彼が私をはだかにした」

というのが、彼を非難する一つの材料になった。彼女の親や周囲は、彼が彼女をはだかにしたということ、さも重大な犯罪のように解したらしいのだ。床の中で、彼が彼女をはだかにしたのである。それが、彼にとって非難される口実になるうとは夢にも思わなかつたろう。二人きりの場合には、何でもないことでも、公やけに持ち出されると、いかにも彼がすれっからしのような印象を与えるものだ。おかしいことである。彼はおよそすれっからしではない。

「新婚旅行のときに彼がこういった。君の友達の中にきれいなひとがいたね、あのひとと結婚できたら、幸福だつたらう……」

彼が冗談にいったことである。そのことも、離婚の理由のひとつになった。しかし、この冗談は明らかに彼の黒星であつた。新婚旅行という愉しがるべき時に、妻以外の女のことを持ち出す

のは、不穩当である。彼女は烈しい屈辱を感じた。彼としては、運命が彼女を自分の妻に決定してしまつたのだから、もはや何をいってもかまわないのだという解放的な気分になつていたものとみえる。そのことは、また新妻に対するふかい信頼ということにもなるのだった。が、彼女はそうは解釈しなかつた。

彼は商売女の経験によつて知つた性知識を、彼女の上に、行つたものらしい。そのため彼女は傷をうけた。婦人科医は診察の結果、炎症がひどいので、すぐ手当はできないといったそうである。性的無智であつた。

「ぼくの愛情が通じなかつたことが、残念です」

と、彼は私に告白をしたが、悪意はもつてなかつたのだ。妻を愛していた。ただ、そのやり方が、あまりに独善的であつた。結果は悪意があつたかのような別離となつた。彼女の両親は、彼が娘を大切にしてくれない、自分らに対してもやさしくないということをくりかえして、彼が自分らの財産を狙っているのではないかとさえ疑いをかけるようになった。そのことが、はなはだしく彼の自尊心を傷つけた。離婚に肚をきめたのも、そのことが決定的な理由だつたようである。

つまらないことから、夫婦別れをしたものである。第三者の私はそう考えるのだが、当事者としては別れる以外に方法はなかつた。しかし、何か不聰明である。人生の門出を誤解で双方が傷

ついでしまった。

私はこのことが、二人の未来にとって悪い蹟きにならねばよいがと思っている。彼女は、必ず臆病になるだろう。しかし、二人は皮肉にもこのことによって人生を知った。それまでの人生は、芝居の書割のようなものだった。彼はまた、もっと異性を知らねばならないのだ。

(私の欄)

*

私たちが理解に苦しむようなことも、若い世代の人間や、無経験者はやってのけるものである。理解が出来ないからと言って、彼らの真実を否定するわけにはいけないのである。家出をした二組の恋仲の店員があった。その一組は薬をのんで、情死をとげた。別の一組は友達の中を知っていたが、とめるどころか、協力者であり、自分らもあとから情死を実行するつもりであったという。ジャーナリズムは、心中に酔った人々という見出しをつけた。なるほど彼らは、生活に窮したあげくの死ではなかった。結婚を反対されて情死したのでもなかった。死の原因がわからないので、謎の事件とされた。二十二歳が三人、一人が二十歳であった。未知のものへの彼らの祈り、あこがれ、純粹でいたいという慾望というものをみとめない限り、彼らの情死の原因はつかめない。恋愛の性質の中には、そうしたものをかりたてるものがある。馬鹿々々しいと言え

ば、それまでのことであるが、その年代の男女は、ただの一瞬を永遠につくり直す魔術を心得ているものである。それに酔うことが可能である。二人のからだ結びついただけでは済まされず、それを越えたあるものを幻想することが出来るのだ。未来への祈禱というような形で彼らには感得されるものらしい。しかし、現実にあつては、そんなものはたあいもなく粉碎されてしまい、夢を托す対象を得ることが出来ない。そうなれば、勢い彼らは未知の世界に托すことになる。情死という手段は、あくまでも手段であつて、その場合死の恐怖はすこしも彼らを怯やかせないものである。恋愛の理想主義的な面を強調し、のぼしつづける結果かも知れない。死ぬ機会を失つて、彼らがそのままの状態で生きながらえたとしたならば、やがて彼らは自分だけが純粹の恋愛をしていたのではなく、一般的な恋をしていたにすぎなかったということに気がつくものである。特殊な恋愛などあるものではない。ただ恋愛のもつ種々のフィルタによって、理想主義から性愛の間を歩きまわるにすぎないのである。

(さきまの記)

*

当時二十一歳のS君は、すでに二つの恋愛の経験をもっていた。女性の肉体の秘密を知っていた。ドン・ジュアン式の多情であることを悪いと反省するどころか、己が青春をかざるもつとも輝かしい勝利のように考えていた。異性に対して大胆にふるまうようになっていた。ところが或る

女性を恋するようになると、手も足も出なくなったのである。女に経験のあるS君にも似合わず、彼女の前に出るとおどおどとした。自分という人間が変わってしまったように思えた。火鉢をはさんで話をしているだけが、精一杯であった。手に触れることも出来なかった。まして肩を抱きよせる勇氣も生じなかった。そして却って、そうしていることに、S君は幸福を感じていた。小心翼翼たる滑稽な自分をかえりみると、これこそ本当の恋だという気がするのだった。彼女の方でもS君の心を十分に知っていて、それに報いようとしていたのだが、女の方から積極的に出ることは出来なかったのだ。その内に、彼女は親のいつけに従って結婚をした。彼女は恋の形見に、ハーモニカをS君にくれた。彼女が良人と町を歩いたりしているところを見かけると、S君は息がつまるような衝動をうけ、自分のいのちが否定されたように感じたものである。その後S君は大学を卒業して、会社にはいった。ドン・ジュアン式の多情を実行するのだという子供っぽい野心は消えていたが、その後の女出入をみていると、まさに小型のドン・ジュアンであった。異性に対する彼の態度は、官能のよろこびを追う享楽主義者であった場合が多い。やがて妻を迎え、子供も出来た。時々過去をふりかえる時、交際のあった女性のことよりも、手一つ握ることの出来なかった女のことが妙に鮮やかに思い出されるのである。皮肉なことに、青春の記念は、彼女が独占しているような工合であった。S君は口惜しいとも思わなかった。記憶の中に酔乎として残る映像を、いつまでも大切にしていたかった。S君は、五十歳を越えた。停年に間近

であった。偶然S君は十五、六年下の女性にめぐり合った。一ト目見た瞬間から、往年鍛えて来たドン・ジュアン式の血潮がわき立った。女は未亡人であり、会おうと思えば、いつでも会える環境にいた。S君の子供は、大学を卒業して、会社勤めをしている。S君の過去には、未亡人の経験も二、三あった。初めS君は彼女を過去に経験のある未亡人と同じように考えた。彼女もS君に好意をよせていた。S君は度々経験のある恋愛に到るまでの順序を辿りはじめた。彼女との会食、彼女との映画見物、観劇、彼女はゴルフもやるのでS君は二、三のゴルフ場につれて行った。恋愛というものは、その基調を相互の理解に置くのだとS君は考えていた。そして結局、ほとんどの場合、エロティズムに落着くものだとして割り切っていた。いよいよ最後の舞台になった。

S君は年配相応の厚顔から、いとも無造作に彼女を抱いた。彼女は初めすこし抵抗をしたが、おとなしくなった。S君は唇を求めた。すると、彼女は拒んだ。その拒み方が、異様であった。何かいのちほどに大切な、正しいものに、それを無視して、横暴な手が増えられたのだ。本能的にS君を避けたのである。それは逆説的な媚態でもなかった。S君は無造作に考えていたのだ。過去にもそういう例が度々あったからだ。彼女には、毅然としたところがあった。S君は愕然となった。見直さないわけにはいかなかった。その瞬間からS君は、二十歳の恋人のように落つきを失い、彼女の前では小心翼翼たる無力な男になってしまった。我ながら思いがけない変化であった。その時までS君は彼女を、一つのものとして見ていたわけである。つまり、エロティズムの